



共古日録

十五

三
七
清
印

南
若
知
抄
本
世
代

山
東
省
東
平
縣
知
事
印

山
東
省
東
平
縣
知
事
印

山
東
省
東
平
縣
知
事
印



特別
15
1413
17



林洞海文子施
筆

洞海下刺
詩

事し... 洞海... 和訓... 詩... 洞海... 和訓... 詩...

洞海... 和訓... 詩... 洞海... 和訓... 詩... 洞海... 和訓... 詩...

洞海... 詩

洞海... 詩

洞海... 和訓... 詩... 洞海... 和訓... 詩... 洞海... 和訓... 詩...

物見の考中
考へて生れ
迷宮

かうぞと命下りしを此頃外奉
周と懐おせしは言未年肥前
りて家来といひて置しに古
さうせし見るとは家元元
りて考れれば左に非ず
なり 器と云ふにあり共古
感元誓と云ふに銅り也
て水戸と云ふにありに
思ふに家元の感とあり
治来と云ふにありに
申すに古の著者
なるが如くあり

馬上の考

中箱本袖物考の考
新考の文にして
殊に用ひては
す 枕考の考
一形
了と新考
と申すは
と申すは

ソワカ

御物鴨毛雙丸
の録文

鴨毛の扇丸録文

東寺安録二出

種好田良易以得穀
 諱辭之語多悦會情
 正直爲心神明所祐
 父母不愛不孝之子
 清貪其樂獨富恒憂
 君臣不信國政不安
 孝當竭力忠則盡命
 君子不信家國不睦
 正直之言則心逆耳
 禍福無門唯人所召
 明君不納不益之臣
 父子不信家國不睦
 孝當竭力忠則盡命

○ ○ ○ ○ ○
 ○ ○ ○ ○ ○
 ○ ○ ○ ○ ○
 ○ ○ ○ ○ ○

此如くは、
 し、細く、

御物鴨毛の丸

中々谷所安養寺考堂前二山林歌城の丸の録文

法名智約轉生善女
 嘉永甲寅年閏五月十五日

愛約萬米記
 佛達美知備多麻弊 死出乃山
 那久那久比登利 越年此子平
 安多能能奈成室乃王等我米傳記
 萬米子平露身見奈志都留式

檀那 山林歌城
 同 小谷出

御物鴨毛の丸

此歌城の丸の録文
 中々谷所安養寺考堂前二山林歌城の丸の録文
 法名智約轉生善女
 嘉永甲寅年閏五月十五日
 愛約萬米記
 佛達美知備多麻弊 死出乃山
 那久那久比登利 越年此子平
 安多能能奈成室乃王等我米傳記
 萬米子平露身見奈志都留式
 檀那 山林歌城
 同 小谷出

此の湖の
水は清く
深しき
なり

此の湖
水は清く
深しき
なり

此の湖の水は清く深しきなり。湖の周囲には松の木が生い茂り、其の葉を
水早れ清く深しきなり。湖の周囲には松の木が生い茂り、其の葉を
樹木なるは、その葉の緑は、湖の水の色と似て、清く深しきなり。
又湖の底には、石や砂の塊が見え、湖の水の色と似て、清く深しきなり。
昔の人は、この湖の水を飲むと、病が癒え、長生きすると言った。
大木は、湖の周囲に生え、その葉の緑は、湖の水の色と似て、清く深しきなり。
多くは、湖の水を飲むと、病が癒え、長生きすると言った。
此の湖の水は清く深しきなり。湖の周囲には松の木が生い茂り、其の葉を
水早れ清く深しきなり。湖の周囲には松の木が生い茂り、其の葉を
樹木なるは、その葉の緑は、湖の水の色と似て、清く深しきなり。
又湖の底には、石や砂の塊が見え、湖の水の色と似て、清く深しきなり。
昔の人は、この湖の水を飲むと、病が癒え、長生きすると言った。
大木は、湖の周囲に生え、その葉の緑は、湖の水の色と似て、清く深しきなり。
多くは、湖の水を飲むと、病が癒え、長生きすると言った。

此の湖の水は清く深しきなり。湖の周囲には松の木が生い茂り、其の葉を
水早れ清く深しきなり。湖の周囲には松の木が生い茂り、其の葉を
樹木なるは、その葉の緑は、湖の水の色と似て、清く深しきなり。
又湖の底には、石や砂の塊が見え、湖の水の色と似て、清く深しきなり。
昔の人は、この湖の水を飲むと、病が癒え、長生きすると言った。
大木は、湖の周囲に生え、その葉の緑は、湖の水の色と似て、清く深しきなり。
多くは、湖の水を飲むと、病が癒え、長生きすると言った。
此の湖の水は清く深しきなり。湖の周囲には松の木が生い茂り、其の葉を
水早れ清く深しきなり。湖の周囲には松の木が生い茂り、其の葉を
樹木なるは、その葉の緑は、湖の水の色と似て、清く深しきなり。
又湖の底には、石や砂の塊が見え、湖の水の色と似て、清く深しきなり。
昔の人は、この湖の水を飲むと、病が癒え、長生きすると言った。
大木は、湖の周囲に生え、その葉の緑は、湖の水の色と似て、清く深しきなり。
多くは、湖の水を飲むと、病が癒え、長生きすると言った。

鐵是二種連入司鑄鐵頃之以功費多而止

愈積愈多之鐵以資用鐵謂之鐵諸注多誤

義別鐵謂之鐵以資用鐵謂之鐵諸注多誤

梵言闡提此為金鐵

真然曰之常山之口東視山之口其二者埋銅于

口以盤石鎮其上漢時其山下有層石家大常則有巨

口埋銅於此今在也亦有鐵鐵在西北小山上而

也唐穆宗時戶部尚書楊於陵云前元中天下鑄錢七十爐歲

八百萬今止十餘爐歲八十五萬元結六年東南歲鑄錢二

二百五十萬只相加元豐監歲鑄十萬已常長慶

時天下之教以矣孔子雜說

或謂子安王女嫁城子吳興也者州城北二十里後耕

者每種者有狀如前菱中有齋字為白晏子金故

其必而晏子城如名晏子鄉

金山寺在潤州金山上層有那波院斷乎以建伽

藍忽一日江邊獲金數鎰妻南因賜名金山寺

漢成帝元狩四年造以百金為之為先乃只錄錦

金文繡以五采凡朝野聘享必以皮幣薦璧玉而行用

四千萬

漢武初四年始造錢造而度皮幣直同十金凡為鑄那皮幣不得

行所推高者造幣第一後世猶幣聲千形此

亦精幣之發行也

夫者一極幣而流之為也見之

唐書元元中李輔國奏內殿龍既鑄銅鐘乃
及乾元錢二文於鑪中祈司如龍形萬福祚無
疆元寶珍琬則願不竭不樂一語一湯豆見於外
鐘或如新祈以錢中藏之為鐘中元
錢也

半錢 王明詩迤西胡考郭翼元尚獨玉佩年
半錢行至張安國云建康寶初分幣然地亦破時
一錢 青風明月不用一錢買李德裕

宋大京時內藏助庫每年計用一牙錢記
二錢 唐高宗合以好錢一文買惡錢兩文
和六年天下米斗有值二錢者 唐元

三錢 唐太宗時米斗三錢

四錢 昭帝元始詔罷權幣官令民得以律自占租費

五錢 漢宣元康間穀石五錢 漢望月童青鵝

六錢 元祐十三年制歲終斗米七錢 儀禮註

七錢 儀禮註而多一少為單錢半錢七也

八錢 儀禮註而少一多為折錢折錢八也

九錢 魏元嘉興和中穀斛九錢
十錢 而東焦蕭僅十錢曹深居東自堪憐京成

石念清在便書盡日厨頭不遊烟 郭詠詩 管子曰
中歲之穀糶石十錢

二十錢 管子曰歲之穀糶石二十錢

三十錢 管子曰月入三十錢之籍為錢三千萬

四十錢 高祖為漢王為東人以是秦復其渠師

七姓不輸租賦然戶乃歲入貢錢四十

五十錢 唐明宗時軍用不給乃稅向架算除陌

錢除陌錢者凡少於陌與及買者每錢一絲言陌中錢

六十錢 命希學准關志凡船梁頭滿八尺稅錢六

七十錢 京兆諸務斗米不過值七十錢 陸贄疏 梁普

通中江郵以上七十為百名曰西錢

八十錢 孟康注國語母子錢多錢重為母輕為子若

破錢以東二十為百名曰東錢 唐昭宗定八十錢

九十錢 計然曰且糶錢九十則民未病未則助不出書

天寶中天下置九十九鑄鑄錢

而錢 嚴君平骨卜成都日得而錢則而肆下簾

而請老子

二百錢 唐永徽以後海內富庶弱死二百錢 詳生男

三百錢 唐宣相就飲一斗恰有三百青銅錢 杜詩

漢平帝元始元年天下女徒已論歸家僱出錢月三百

建炎元年汴京升米錢三百宋史

建炎元年汴京升米錢三百宋史

四百錢 夫有所短錢者所畏而約行焉而物生焉
大葉或書與一海內之令性妙不減并改而與之
我舍法得事高次領令錢惟得三而遂竟定械械使若可破
高四百改而前而文建者念曰二俱有智其事難欺便以
而錢後教還了

五百錢 五百青錢而家缺亦供屋打白供屋

唐張九齡詩耐公樓上如解酒五百青錢買一斗後人

到唐時酒價有與手此為正者

六百錢 梁時江陵將覆用錢每百覆涼六文稱為六循
識者以為九者陽九六者三百益符歷數非人事

七百錢 唐劉倕職三班月俸七百錢羊肉半斤

按無名子詩曰七百俸錢何日富半斤羊肉幾時肥

八百錢 南陽從事車真楚曰吾年狂志盡譬如八百

錢馬生元同增 梁武末年都下用錢以九十為百名曰是

錢乃詔良通用是陌錢而人不從

一千錢 一百一錢千日一千繩鋸木斷水漏石穿

二千錢 平準書率鑄錢二千而一算 建炎中

年潼川鐵米斗二千六年夏蜀大饑米斗二千王莽時

米石二千 李德裕言徐德興為宣泗州募人為僧以資

上福入輸錢三千淮右小民規影德賦失丁男二十萬

四萬錢、東及與少延書每月朔取錢四千五百畫
 為三十塊、注以月所用錢、不過四千也、
 備他用、注以月所用錢、不過四千也、
 諸作有祖及鑄率錢四千一算、
 五萬錢、注少王刀奴以錢五千召點工於腹胸刺定
 山亭也、注草木及鳥無所不備、注而陽雅姐
 六千錢、宋行宗馬志中書議云、官卷一馬或為錢
 一十七千、及養一馬、免折要、緣納錢二千五百、注、非所納
 七千錢、唐前元後米斗七千、注念領志
 八千錢、計然曰、主糴錢上不過八千、則農本得利、注越絕
 九千錢、龍涎香一斤、值其國金錢一百九十、准中國

銅錢九千文 額外雜紀

萬錢、何曾曰、食萬錢、稱之無不著處、黃金一斤

直萬錢、注會稽、注與沽一斗酒、恰用十千錢、崔輔國詩

二萬錢、注道書云、章斗取錢、女借天帝二萬錢、下禮

三萬錢、注孫之翰、人饒石、硯之道三十千、阿之得、承臨、

四萬錢、注蔡君謨、造百茶、每斤值一萬錢、歐之忠、清

五萬錢、注鳳明、月本無價、可借只賣四萬錢、

六萬錢、注五子、直五萬錢、注吾書、何如、承師、真、同、承

六萬錢、注汝、賜、三斗、始、刻、天、張、旭、三、杯、草、聖、傳

左初日興費萬錢杜詩 楊雄為節之成有

初令尚書賜筆墨錢六萬獨觀書於石渠塔園歌

七萬錢 增乙為李林甫漢林甫施鞞一日費

三直七萬

八萬錢 層高細入長安民間行錢環錢精八九萬

和羅錢 萬餘錢 元豐元年始鑄河東歲始

九萬錢 蔣濟路過攔瓦每鳥集取則尸頭見示

見馳三蔣通視之則所鑄皆為通天岸也後王武崗

有錢獨遺錢九萬 有高人欲投於河中

是計錢九萬 蔣濟言中玉符玉杖二物青本三

十萬錢 楊子雲楊子言蜀人齋十萬錢願載名子

有詔不聽 惟唐書平業費錢十萬有奇

二十萬錢 梁武帝以錢二十萬易定林前前園

獨龍阜以葬 馮垂空行宮成奴史鳳成納錢三十

三十萬錢 馮垂空行宮成奴史鳳成納錢三十

萬獨至 馮垂空行宮成奴史鳳成納錢三十

言五世 蘇若倫之不及名姓 送錢四千五百

城李士京王其役日費四百千為備道 元豐修

五十萬錢 曹彬下工帝上尋使相之費乃賜錢

五十萬 曹彬下工帝上尋使相之費乃賜錢

五十萬 曹彬下工帝上尋使相之費乃賜錢

初平四

年穀一斛五十餘萬錢入相食

六十萬錢 殊修之去荆州計燈由鹽米費六十

七十萬錢 唐雲州王屋女乞錢七千萬買一玉釵

淮拒之曰一釵七十萬此妖物也 漢妃者琥珀釵

一雙直至七十萬

八十萬錢 班固與弟超中書多寶持中前書又錢

九十萬錢 王荆公吳文人為學一妾為同女治以而事

之入可錢或何曰九十萬以今為之如知錢盡賜之

而萬錢 凡棺者初道僧家言疏其後額以

分與交焉待之錢百金 自王孫亦已

千萬錢 素衣與安國仲子中人吐交確請互右記

萬萬錢 愚令考經何之制為居成之三去遠

修合用古錢者用不謂之善是取中可見之

制也 崑山家制 張鷟之文如青銅錢萬選萬

中疏青銅錢學士

其古之半錢一萬錢日多者及中參考之

特考

平準書秦以一鎰為一金漢以一斤為一金
紀中古注曰諸賜金不言黃金者一斤與萬錢等
金四兩而直一兩也
董彥遠曰漢一斤

漢五斤以多重一斤若今萬錢或曰古十兩
為一斤

兵部興師十萬日費千金
燕昭王以

千金為士皆此數也非若今人以二十四銖為一金也
說文權十分黍三重也
漢律歷志十黍為一釐十釐

為銖黃鐘一命容千黍重十二銖而三二十四銖為一
兩十六兩為一斤三十兩為一鈞四鈞為一石
說文鎰六銖也古人言較量鎰銖謂輕微也荀子注

誤云八兩曰鎰正韻引荀註非也韻會注云八銖為鎰亦
非也說文為正

鎰金數也國語二十四兩為鎰趙岐孟康皆曰鎰二十兩鄭
康成曰三十兩正韻註載諸說無考正則是古今鎰無
定數也或曰金貨志云周制黃金方寸而重一斤又云方寸

為一金史記註臣瓚曰秦以一鎰為一金漢以一斤為一金
蓋漢以前以鎰名金漢以後以斤名金也鎰者二十四兩

有者十六兩也孫愐云二十四兩與國語同鎰通益漢
志黃金以益為名荀子斤溢之韓非子鑠金千溢一說

本作鎰說省作溢又米一升二十四分升之一為一溢禮朝
一溢米及一溢米孔叢子曰而子曰掬一子曰溢方比曰溢

一溢米及一溢米孔叢子曰而子曰掬一子曰溢方比曰溢

一溢米及一溢米孔叢子曰而子曰掬一子曰溢方比曰溢

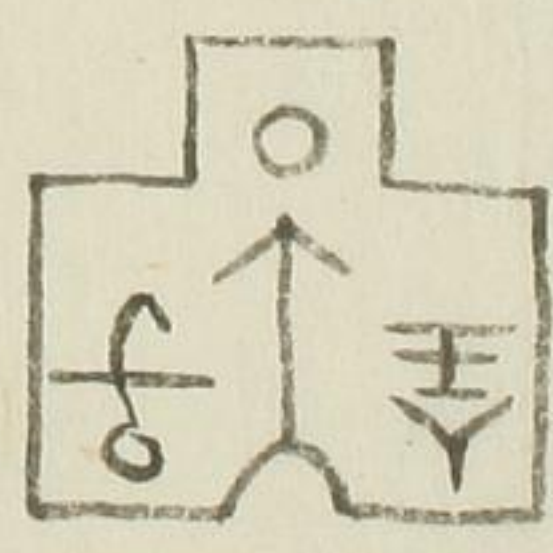
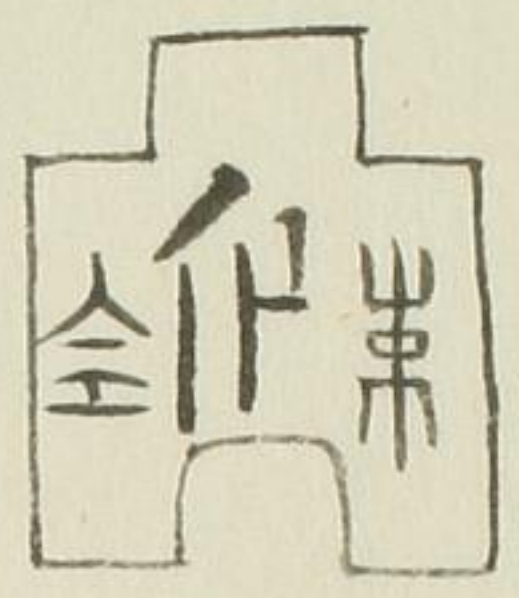
一溢米及一溢米孔叢子曰而子曰掬一子曰溢方比曰溢

與錢同是火記二十而益誤也

孔父雜說曰考惠記註引倉貨志黃金一斤直萬錢乃知漢金之賤也今金而有直萬錢者則漢金一斤與今一兩價矣直人主賜金以千百計也唐時金必貴太宗以子志甯孔穎達諫太子各賜金一斤帛五百疋沈存忠云古之一斤今四兩餘也然則一兩之直二千五百而已

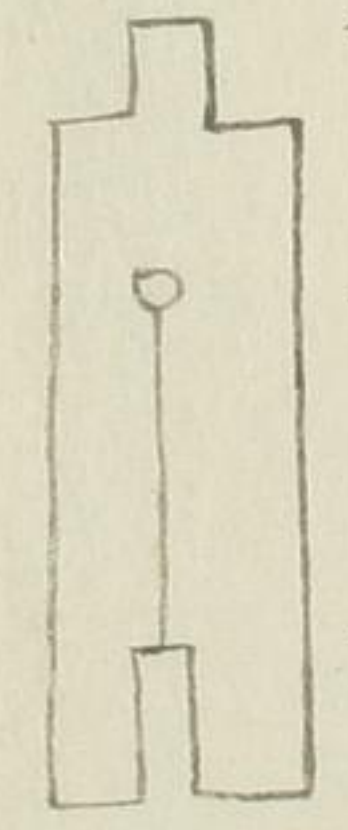
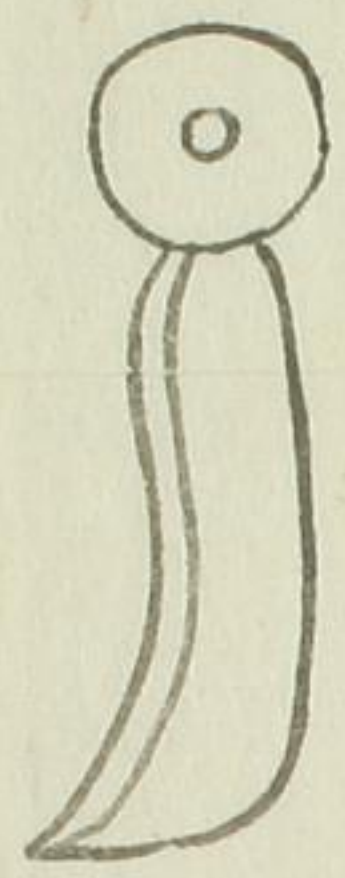
錢神志卷一

田本

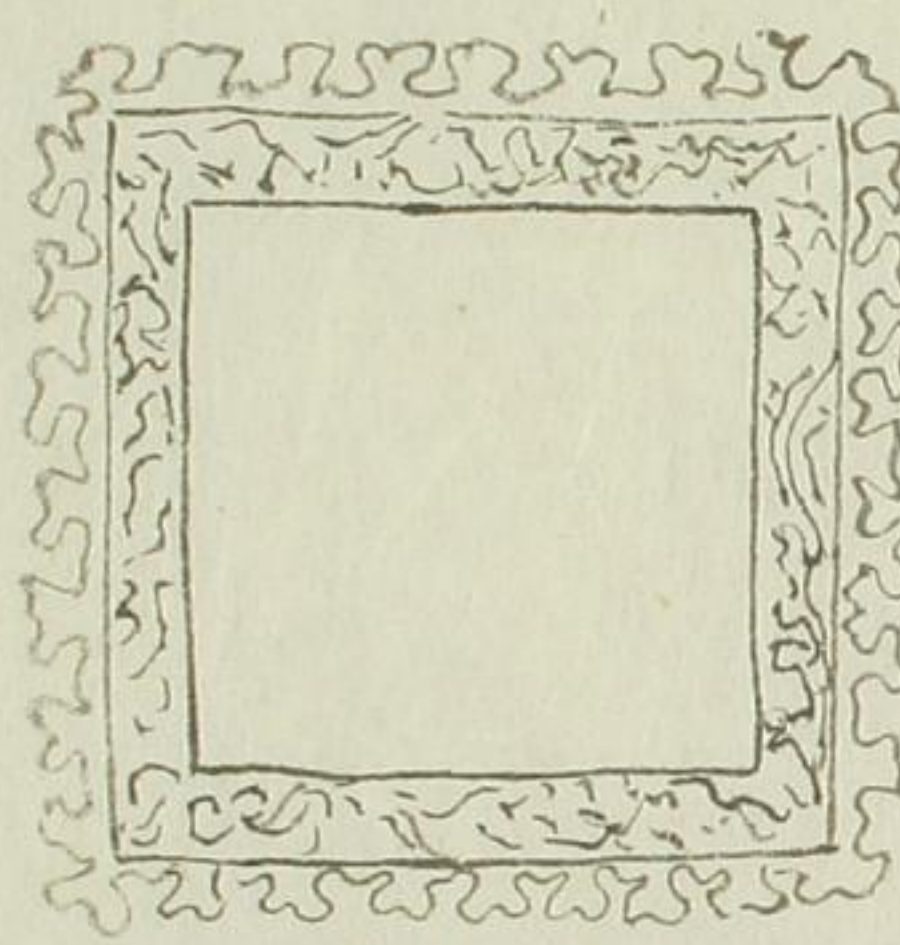


右田本錢長一寸七分有厚一寸是門厚六分

考古之田本圖之曰田本之形何如也起之曰田本之形何如也起之曰田本之形何如也



漢皮幣



右皮幣漢武元狩四年造以白鹿皮為之方尺緣飾今文繡以五采凡朝覲聘享必以皮幣為禮得之而後行用四千萬

唐憲宗時令高貴堂多以委成法諸進奏院及諸軍諸
道幕府以輕裝趨四方合券乃白之魏元微按此構法所
由起但委銀而合券以白券與楮是二物耶若今之即
以鈔為銀而用之也
宋太祖時
真宗時

天聖中界以百二十五萬三千五百四錢為額在汴京的改定
錢乃為銀引名
建隆三年十月移茶州置銀引額
興元年十月初置見錢南
高宗時交之契曰如沈該提之後但官中常有百萬
然遇交之歲原自買之即無契矣
熙寧二年女真以少楮宋四川交之法置交鈔庫造

鈔引一萬二千三百五十五萬五萬謂之大鈔一百二十萬
七百五萬謂之小鈔與錢錢用
元世祖始造交鈔以絲為本每銀五十兩易絲鈔一千兩
至正十年詔曰世祖頒行中統交鈔以紙為文厥後造元
鈔以當五名曰五兩如楮而紙實未用歷歲益久
明制銅錢之鈔則兼行通而年之後鑿亦著述
祝允明野史曰洪武始造鈔
楊帝之及後出後世構堂之術於非經文可行之道也
或亦志以或之錢是以泉志以之
寸如或書以載寸之

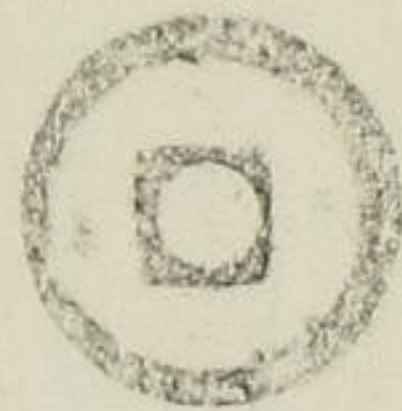
大正改元 及出

明治三十五年七月三十日以後を改めて大正元年とする
の詔ととも七月二十三日大正元年とす
大正元年傳に君子大居正 易經に大亨以正天之道也と
あるにともとのことなり

安南大正の年

大正の年號を那ふはくも安南の年號也 明の嘉靖九年
順宮二月莫登瀛庸の子莫登瀛爵位し大赦を行ひ
年號を大正と改元せしむるありて大正元年とす
大正元年大正通寶と改め莫の年號を大正と改め
大正元年の長子福海とて明年改元し大正元年とす

莫登瀛の
鑄之大正銀



大正改元の詔

明治改元の詔より大正改元の詔のありき
詔多しきしは 大正改元の詔のありき
正からず 明の年號を大正と改め
大正改元の詔のありき 大正改元の詔のありき
大正改元の詔のありき 大正改元の詔のありき

田安宮の年號

大正改元の詔のありき 大正改元の詔のありき
大正改元の詔のありき 大正改元の詔のありき
大正改元の詔のありき 大正改元の詔のありき
大正改元の詔のありき 大正改元の詔のありき

大正改元の詔

大正改元の詔

園山侯也同家の大刀持せり... 御方御の袋に納りし... 御器候而井は... 御方御の袋に納りし... 御器候而井は... 御方御の袋に納りし...

御方御の袋に納りし... 御器候而井は... 御方御の袋に納りし... 御器候而井は... 御方御の袋に納りし...

御方御の袋に納りし... 御器候而井は... 御方御の袋に納りし... 御器候而井は... 御方御の袋に納りし...

御方御の袋に納りし... 御器候而井は... 御方御の袋に納りし... 御器候而井は... 御方御の袋に納りし...

御方御の袋に納りし... 御器候而井は... 御方御の袋に納りし... 御器候而井は... 御方御の袋に納りし... 御器候而井は... 御方御の袋に納りし... 御器候而井は...

いふを侯の二分先片倉の十文は先細焼を焼く焼は一斗なるが
焼士の先々に焼く焼くはあつた焼くは焼く焼くは又と焼くして
率馬の焼く焼く焼くは焙臣には数焼かす名焼の吉川文は焼く
は焙く焙く焙臣の焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く
無焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く
船名成平侯ありの對馬守はわぶの根をくくみ色に焙く焼く焙く
と同じ又焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く
萩侯の先細焼の長草は黄色
八月侯南郷の二分名の先細焼の長草にして青色
松山侯の先細焼の焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く
妻の二分名の山左兵衛の焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く
對の焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く
後山侯の焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く
長柄今焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く
の焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く

高氏の前の焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く
萩支侯徳山侯を利大和守三斗名の焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く焙く
焙く
薩摩侯の焙く
復持の焙く
岡山侯の焙く
下焙く
上萩支侯の焙く
焙く

右交せ内ニ向けて入り檢先の外に命ふをり又下馬の内乗與
候御續行すこと先の與當りてあれはその跡皆行なり
正多日帯りし上枚斗はこの時徒士居り教をありと云ふ亦軍
法に似たり

此年候の長中其は二重包と云ふ御成り也
能見守り好候の御籠は前々有はしりて流致すやうに作りたり
馬馬いり又其も馬必覆せ用ひしが馬の籠の首を流致すも
ふたありし力と極くしに御辨のるも又かぶの底にぬぬの
ありしれり也其はあはれ等也といふ也
瑞圃候より一箱あるは少年の御成一本鏡先箱一
其は一箱ありしは蓋として二本檢先箱二合と云ふは又後御成
御月候より右箱の一本一箱ありしは又此の箱と檢二本箱二つと

わしめされども今に嫡子は一本一箱なりと聞ふ由に依らぬ
大洲候より六ヶ石の御成をなれども檢一本なりしは彼の先祖人檢
二本一同につかふ者にあはれし御成の如くなりと聞ふ又此の御成石川に
六ヶ石ありしは一本一箱なりと云ふ也
秋田候より御成の御成は御成にして致し田具の如し祖先に
その由ありて用いましむる也
若田候より御成の御成は御成にして致し田具の如し御成の如
の御成は是れ御成の御成にして致し田具の如し御成の如
刀を以て辨ゆりしは御成の御成にして致し田具の如し御成の如
骨を以て辨ゆりしは御成の御成にして致し田具の如し御成の如
以三浦御成の御成にして致し田具の如し御成の如
よしかりしは御成の御成にして致し田具の如し御成の如
を辨ゆりしは御成の御成にして致し田具の如し御成の如

新... 天下太平... 太平... 太平... 太平...

河... 山... 而... 三... 此...

元正甲午
 祈願成就
 五月廿日

河...

河... 山... 而... 三... 此...

新... 河...



支那三年三月廿四日
中四佐より手紙あり
焼失の焼々書あり
和泉の焼々書あり

高き方書
焼失の焼々書あり
和泉の焼々書あり
支那三年三月廿四日
中四佐より手紙あり

焼失の焼々書あり
和泉の焼々書あり
支那三年三月廿四日
中四佐より手紙あり
高き方書
焼失の焼々書あり
和泉の焼々書あり
支那三年三月廿四日
中四佐より手紙あり

支那三年三月廿四日
中四佐より手紙あり
焼失の焼々書あり
和泉の焼々書あり

所敷三百六十所焼失
焼失の焼々書あり
和泉の焼々書あり
支那三年三月廿四日
中四佐より手紙あり

水や火消さず
焼失の焼々書あり
和泉の焼々書あり
支那三年三月廿四日
中四佐より手紙あり

まると云ふの鏡あり、平福寺にありしもの、古来のもの、火燒けが
 火より、又、富山の、平福寺にありしもの、古来のもの、火燒けが
 長者の、瑞うとの、鏡、此の、鏡あり、
 死んだ子の、鏡、此の、鏡あり、
 又、この、鏡あり、
 右の古物、富山に、ありしもの、
 工、富山、淡河神社、鐘、寛文八年、甲斐、即、内城、壬辰、元齋、朝
 寺進の銘あり、
 二合目、小宮、淡河社、日本、武尊、木彫、符、銘、文、治、五年、伊豆、國、走
 湯山、住、瑞、寶、寶、壺、坊、あり、
 古鏡、武西、信、古、奇、四、神、之、文、あり、と、い、ふ、
 五合目、茶屋、に、掛、鏡、一、面、銘、刻、し、て、上、下、切、馬、即、大、正、五、年、

永祿三年三月三度、高行、仍、異、也、あり、
 共、合、五、々、小、屋、に、掛、鏡、天、正、四、年、金、刀、加、人、寄、附、の、銘、あり、
 同、所、地、藏、寺、鏡、首、銅、身、天、正、二、年、の、銘、あり、
 同、所、鏡、口、鏡、首、銅、身、天、正、二、年、の、銘、あり、
 八合目、火、行、合、宣、に、掛、鏡、あり、天、正、十、九、年、駿、州、の、人、寄、附、の、
 奉、納、の、文、あり、
 項、正、観、音、の、鏡、十一、而、観、音、鏡、像、明、應、二、年、尾、張、人、建、立、の、銘、あり、
 同、所、大、日、像、銅、首、鏡、身、大、永、二、年、尾、張、人、建、立、の、銘、あり、
 同、所、銅、花、籠、寛、文、八、年、の、銘、あり、
 村、山、大、宮、并、所、大、日、鏡、像、二、軀、明、應、二、年、尾、張、國、鑄、の、銘、あり、
 劍、の、冪、の、替、大、日、銅、像、寛、永、元、年、伊、勢、人、建、立、の、銘、あり、

同所 大日鏡 延徳二年の銘
 釋迦の刻石の事 大日の掛鏡岩の中あり 延徳三年鑄の銘と
 右は妙園抄よりあるが 不二山道祖堂にありて 延徳三年
 と書田の事あり 此外東方の大宮の又は須走の山にありて
 御所の事あり 古事記の事あり 大宮の向社の古鐘の明徳二年
 大宮司常守の爲に三品所の古金高の鐘を鑄し 大宮の向社に傳し金
 足高の鐘を佛画等と燒て金とせし 大宮の向社に傳し金
 胎藏界金剛の事あり 佛画等あり 佛画等あり 大宮
 の一角の虎男の事あり 佛画等あり 佛画等あり 大宮
 一幅を重照所に贈し 一幅を靜岡清水の真言宗寺に贈し 佛現に
 其寺にありて 佛画等あり 佛画等あり 佛画等あり 佛現に
 今にして思ふに 佛画等に 佛画等に 佛画等に 佛現に

改事撮要

改事撮要 三冊 鑲銅鑄活字板 大本 朝鮮國
 出板を明の宗禎八年乙亥に祖大王三十二年にあり
 書なり 上巻は略史下巻は志海路等あり 活字板と宗禎板
 式例等と記せし 書なり 萬曆板と宗禎板
 と後文異なり 宗禎板と林善言と
 古の改原稿本今中くの高橋とありて 乙亥の月也
 とあり 宗禎の馬琴音目とあり 後ち娘に筆とせし
 し原稿本二冊とあり 宗禎の玉石童子訓とあり 宗禎
 六冊と林善言の書とあり 宗禎の書とあり 大宮の書とあり
 の儀あり 宗禎の書とあり 宗禎の書とあり 宗禎の書とあり
 このうち 宗禎の書とあり 宗禎の書とあり 宗禎の書とあり

馬琴の從爲稿
 本の傍

招南朝の
鏡二日月の中
古鏡畫印籠

五仁五年三月十日
招南朝の
鏡二日月の中
古鏡畫印籠

其日の中古鏡畫の印籠とふあり
鏡形漢土古の鏡五枚半あり開元鏡承平鏡吾朝の古鏡
及宣承平鏡助幸鏡等中にさる雁首のつて物等は殊
に眞に通れり結々眞の蓋鏡中を著きて根の黒檀の鏡根
日表の鏡甲州同舎裡は小十道と云古の鏡その孔より結
せ通すは古鏡のやうにさる首のありて
甲より重きしは柄の如し竹葉の人多きをさるれり
多し重きしは柄の如し竹葉の人多きをさるれり
用安んぬのつて人高橋而ゆの子午き十歳をさるれり
蛇の重りたる中には以て寶ありと云ふ
此の鏡のやうにさる首のありて
甲より重きしは柄の如し竹葉の人多きをさるれり
多し重きしは柄の如し竹葉の人多きをさるれり
用安んぬのつて人高橋而ゆの子午き十歳をさるれり
蛇の重りたる中には以て寶ありと云ふ

招南朝の
鏡二日月の中
古鏡畫印籠

招南朝の
鏡二日月の中
古鏡畫印籠

見しに鏡の元祐通寶の如し竹葉の人多きをさるれり
用安んぬのつて人高橋而ゆの子午き十歳をさるれり
蛇の重りたる中には以て寶ありと云ふ

招南朝の
鏡二日月の中
古鏡畫印籠

此の鏡のやうにさる首のありて
甲より重きしは柄の如し竹葉の人多きをさるれり
多し重きしは柄の如し竹葉の人多きをさるれり
用安んぬのつて人高橋而ゆの子午き十歳をさるれり
蛇の重りたる中には以て寶ありと云ふ

招南朝の
鏡二日月の中
古鏡畫印籠

此の鏡のやうにさる首のありて
甲より重きしは柄の如し竹葉の人多きをさるれり
多し重きしは柄の如し竹葉の人多きをさるれり
用安んぬのつて人高橋而ゆの子午き十歳をさるれり
蛇の重りたる中には以て寶ありと云ふ

招南朝の
鏡二日月の中
古鏡畫印籠

藤 信 茂 内藤
 冠 峯 細川
 利 和 九光
 隆 國 大光
 忠 興 大光
 教 孝 大光
 基 之 大光
 正 友 大光
 攻 宗 大光
 方 顯 大光
 標 國 大光
 以上作詩名

古賀 樸 古賀の戦
 越智 正 登 和菜
 藤 忠 升 平多
 末 道 和井
 乘 尹 和井
 劉 貞 古賀の戦
 藤 長 祥 伊藤
 曾 友 小 徳 和井
 成 美 和井
 源 政 雄 和井
 源 宗 隆 和井
 收 成 著 和井
 義 行 和井
 中 忠 英 和井
 景 晋 和井
 收 成 傑 和井
 曾 井 憲 和井
 林 銳 和井
 林 衛 和井
 井 正 清 和井
 曾 園 曾 寧 和井
 山 維 祺 和井
 菅 登 和井
 康 和井
 以上作詩名

忠 興 大光
 之 倚 大光
 負 征 大光
 柳 庸 大光
 正 南 大光
 正 精 大光
 負 善 大光
 隆 忠 大光
 隆 國 大光
 以上作詩名

雅 延 和井
 正 剛 和井
 忠 肅 和井
 信 徳 和井
 智 茂 和井
 信 明 和井
 正 為 和井
 増 業 和井
 香山 和井
 家 長 和井
 宗 正 和井
 正 教 和井
 政 勝 和井
 五 三 和井
 利 和 和井
 義 行 和井
 藤 山 和井
 吉 圃 和井
 高 備 和井
 忠 平 和井
 齊 宗 和井
 忠 道 和井
 鎮 衛 和井
 教 常 和井
 利 徳 和井
 亂 統 和井
 譽 純 和井
 忠 房 和井
 近 義 和井
 頼 徳 和井
 信 馬 和井
 正 苗 和井
 重 卿 和井
 忠 敬 和井
 樂 翁 和井
 以上作詩名

糸 乃 乃 乃
 糸 乃 乃 乃
 糸 乃 乃 乃
 糸 乃 乃 乃

少年の頃、
 少年の頃、
 少年の頃、
 少年の頃、
 少年の頃、

重宝の事

湯田の梅樹

重宝ありて是れ也 中身は... 或は常凡有見の... 形とあるに換ふ者あり... 己の重宝に換ふ者あり... 湯田の梅樹は...

能保見の事

西文の笑話

重宝の事

湯田の梅樹は... 能保見の事... 西文の笑話... 重宝の事... 湯田の梅樹は...

會款 琴臺 梅舍 瓦 礫舍

春日曼陀羅

古王佐羅 昭顯行 廟 鐘是

齋忌 二箇

古鏡 古王佐羅 昭顯行 廟 鐘是

右大鏡文梅舍

古平鑿 古王佐羅 昭顯行 廟 鐘是

古刀 古王佐羅 昭顯行 廟 鐘是

編鐘

玩成 古王佐羅 昭顯行 廟 鐘是

銅虎符

紅毛劍

自建山至永仁賦親古瑤數面

古硯

天祥堂藏

水瀉

春日年

古硯

天祥堂藏

古曆

徽書記筆

具品數百

虎頭

由玉壺

又正年製墨工

漢精銅鏡

戒檀院善定

天台寺 尊勝觀王

玉塔

工製高麗物

古鐸

古王佐羅 昭顯行 廟 鐘是

練塔

善提山梵書

琉球

古鏡

蘇王

古王佐羅 昭顯行 廟 鐘是

古石

慨畫古收

古代重既

右疾猴庵

火鼓

内以錫... 應... 申七月... 天... 音... 蘭... 庄... 長... 寺...

照札

和州... 寺...

強弓

古... 三...

古瓦硯

朱雲

慶... 寺...

經... 寺...

南都... 寺...

疏... 十... 具... 出... 未... 延... 文... 初...

古鑑

信... 寺...

右玉芝園

舊譯

敢... 性... 三... 年... 應... 亦... 四... 年... 的...

火... 殿... 古... 瓦... 硯... 料...

古... 兔... 而... 瓦...

古... 戲... 著... 題...

出... 雲... 行... 國... 出... 如... 之... 的...

右瓦硯合

御鏡

玉... 州... 一... 言... 真... 寺... 神... 宮...

右... 京... 竹... 林... 傳... 事... 情... 世... 行... 者...

玉... 珠... 珠...

白... 琅... 玕...

瑤... 瑤... 石... 一... 爵...

同開七月十五日再會

神代石

三... 口... 加... 雲... 根... 堂...

天壽

石... 硯... 生... 齋... 子... 厚... 邊... 硯...

古陶硯

色... 園...

高麗

狗... 硯... 建... 長... 六... 經... 著... 銘... 三... 天... 四... 楸... 慶... 明... 古... 州... 中... 水... 井... 各... 寺...

宗翰

論... 三... 科... 書... 碑... 書... 寫...

色墨

大明... 隆... 慶... 年... 製...

右牡丹石

南... 紀...

童... 既... 古... 心...

壽... 石... 數... 百...

古本 正保年中 敬賜 皇國明神臨時祭記 賦日新律寺也

故國主交并 右天祥堂 等政所及了段錢請女和也 約明應

明朝戶籍 明本杜通 典の表紙也 瑪瑙座屏

磁魚 歌羅巴人印格粉 十任心海保元三年 龍湖前山聖

承言寺中古曆 右華陽同 相來山觀恩講古記

鳳嶺賦稅帳 右早川 漢製飯愈器 海師賜 米之由

右三陽六妙堂

伊勢國分寺古尾 右照 觀立石 駿乃加丸文 東寺古伽藍剝物

戒壇院古尾 右尾 象樂御抄古尾 大和管原寺古尾

陀才蜜船 右尾 神籠淵

天台戒壇院差定 右日比杜 觀應

金形猪皮 象皮 右尾 紅毛 こんかすたん 粉羊角魚

古本 右尾 翰有數 右尾 句玉壺 古墨 慶安 經卷 蓋安三年三月

經卷 南都 熟白 古尾 植粉 和歌 羅石 同抄

林...
一...
三...
書...

右骨 同勝... 古鑑... 辨... 年...

彈丸... 紫水晶... 三百... 大玉... 龍... 産...

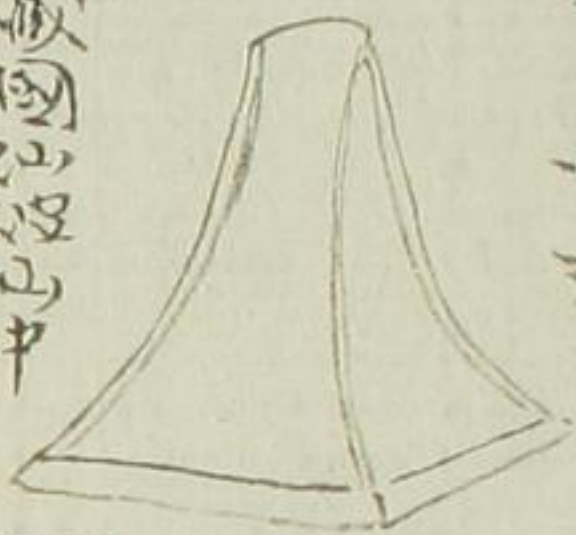
右紫竹林... 林... 世... 行... 考...

日本書紀... 持統天皇... 神祇官... 奏... 上... 神寶...

書... 鑄... 銅... 印... 諸... 司... 印... 一... 面... 料... 熟... 銅... 大... 一... 兩... 一... 分... 一... 厘... 候... 以上...

十月

伊勢内宮政印



法隆寺古印



攝津後

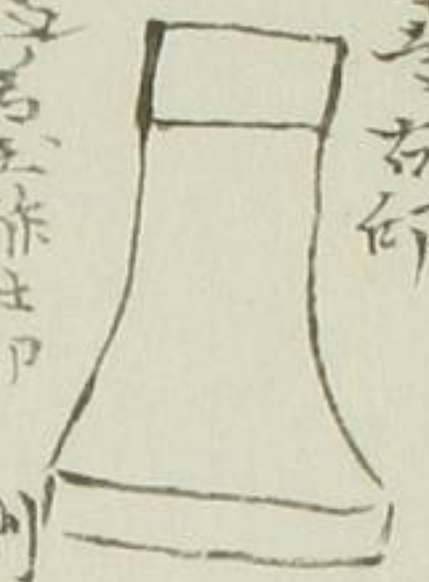
高古印



武蔵國忍山寺



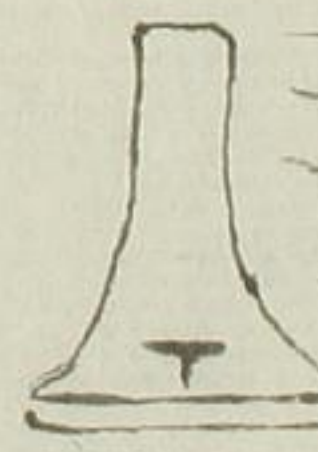
東寺古印



東寺傳法印



東寺古印



鎌倉三王社印



春興の政印の就ては、
 十一年の三月より、
 又、
 馬の、
 今年、
 車、
 皇、
 射、

又、
 馬の、
 今年、
 車、
 皇、
 射、
 今、
 皇、
 射、
 今、
 皇、
 射、

...

考の多し

来たれども... 考の多し... 崎陽車應生東以善誦令賜于世今也刻七詩以博之

一場之觀士矣十午令嚴懷冰裁其相酬歌鼓王

いらく... 梅のほろ... 本意

上願... 天主の慈起... 此天主様... 此のまじり

上願の... 此のまじり

新羅の太比呂命
の御説

新羅の太比呂命の御説の
神代卷の初に神代卷の御説
の御説の御説の御説の御説
の御説の御説の御説の御説
の御説の御説の御説の御説

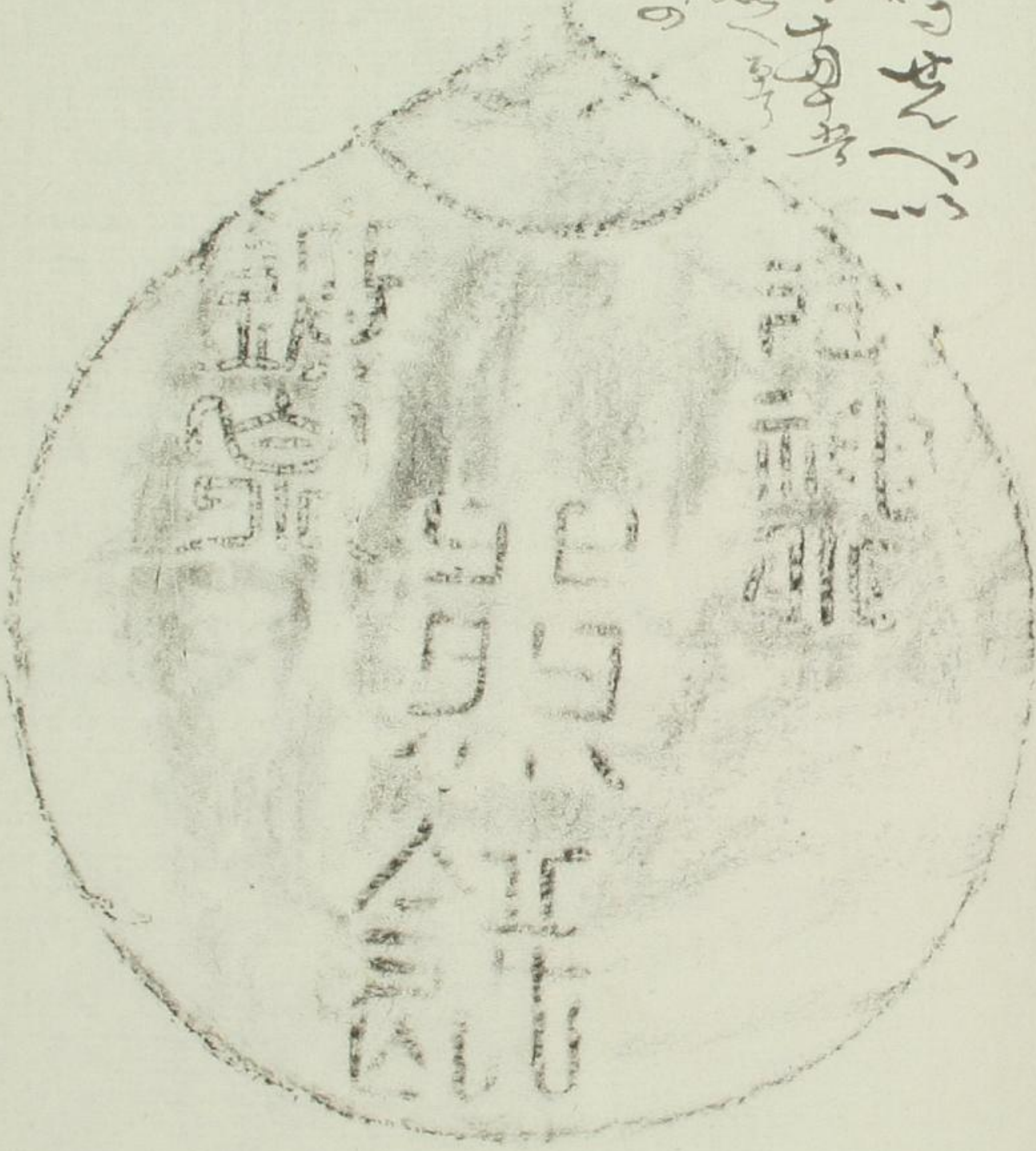
川原の御説
の御説

二神の御説
の御説

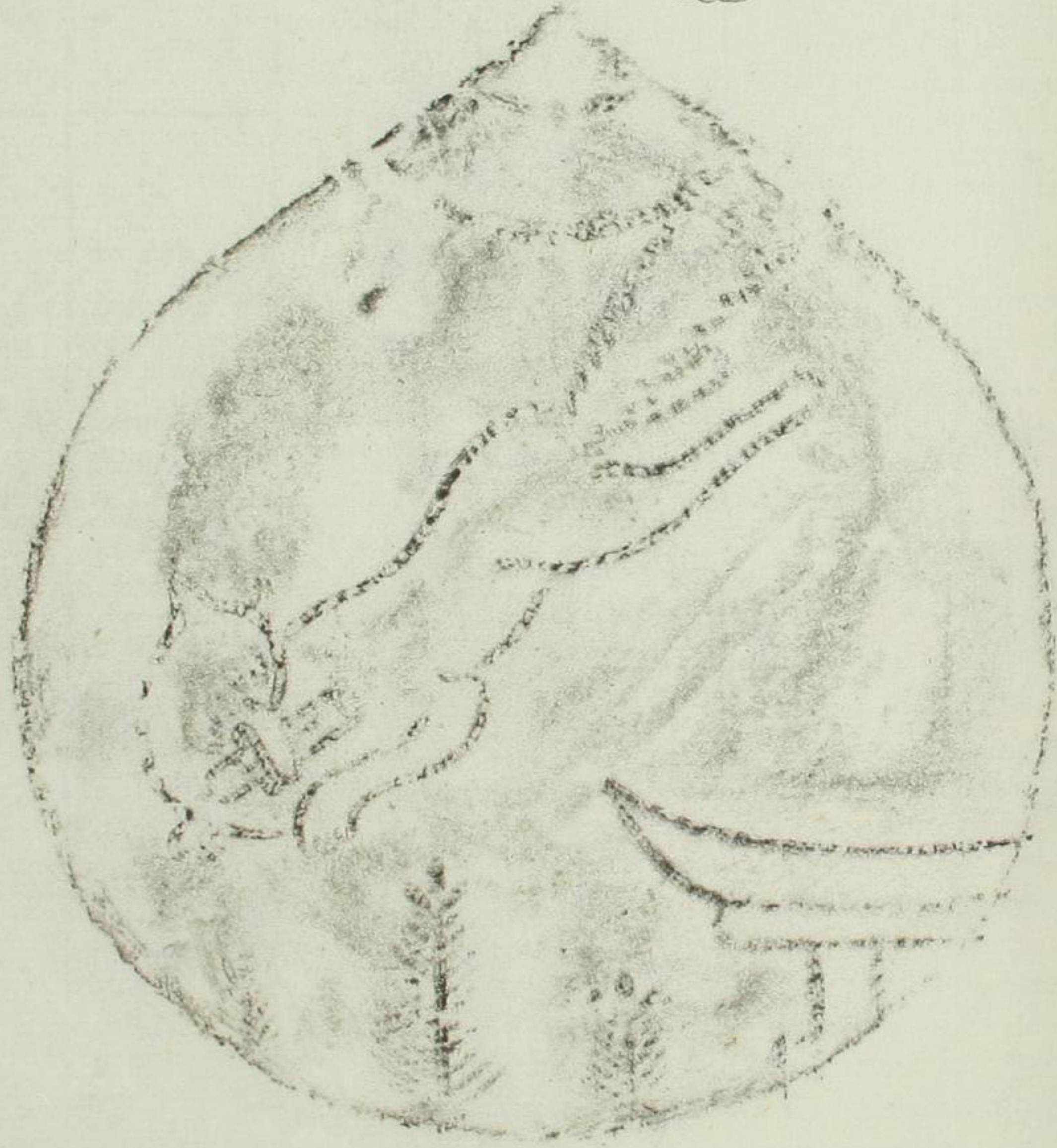
二神の御説の御説の御説の御説
の御説の御説の御説の御説
の御説の御説の御説の御説
の御説の御説の御説の御説

形二板
の御説

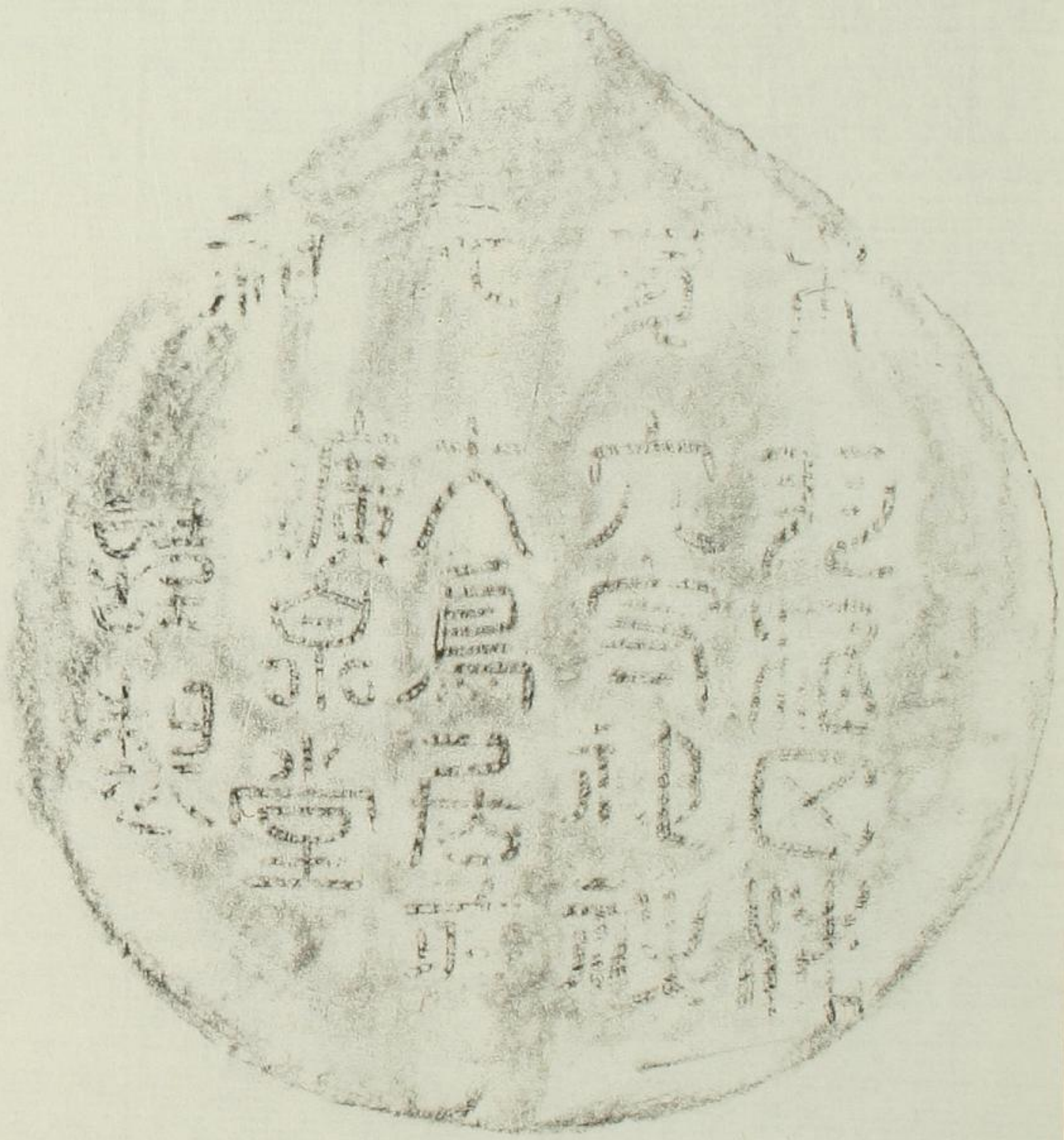
形二板の御説
の御説



表



裏



林文義古証
与西面

林文義古証
与西面
与西面
与西面

是

一銀始丑月之

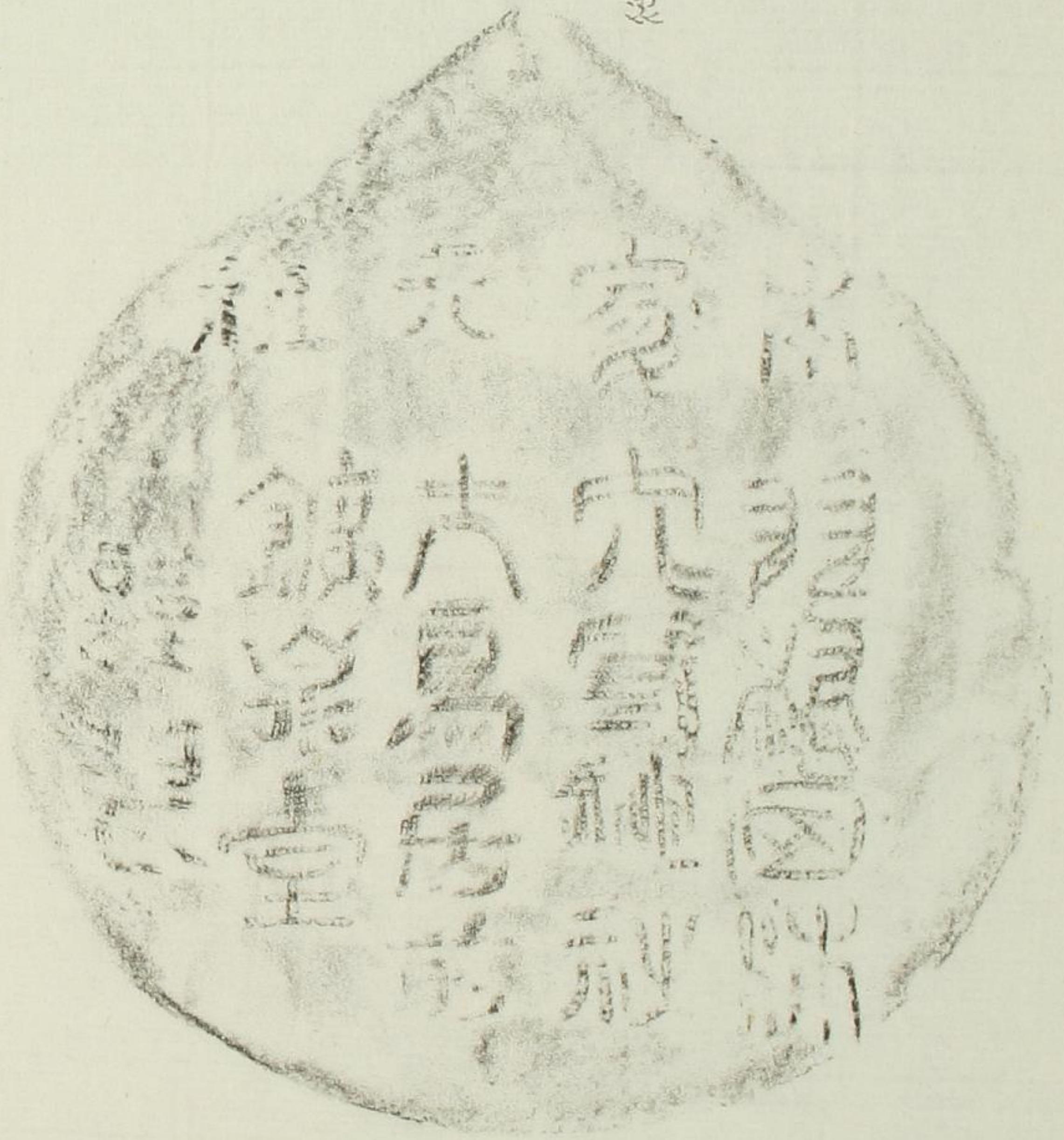
右者正納材本成金了内
德之及中亦重了切
切日之好如也

正徳元年即十一月廿七

九月五日左西面取

平七
七

袁



同文蔵 永祿年向の米借用並二通左の如しもの

借中米事

合七石五斗五升元五斗五升
右波志物三斗三升三合
是言前々美ラキヤリシ米ハ
興院踐ミテ天下一曰 殊
廿八行ハオ遠キヨリ
子ハサチチハオツチハオツチ物
此ハサチチハオツチハオツチ物
候メハ
永祿六年 井 十一月廿四日 張
阿比本二信取

二通と云ふ
字形の如し
云々

借用中米事

合十石 利米二斗三斗子
右波米事候有要借用中度
宜シク申也此物ハ
是言前々美ラキヤリシ米ハ
一石同様ナク在候カヨリ
斗三斗三升三合
永祿六年 井 十一月廿四日
此米ハ
永祿六年 井 十一月廿四日
是言前々美ラキヤリシ米ハ

ヤシラフ
長谷川
九市
只本在
美押

易文
 書銘
 洗盤
 東京
 十業
 徳
 自
 能
 政

易文
 書銘
 洗盤
 東京
 十業
 徳
 自
 能
 政

新
金

新
金

新
池

神
池

Handwritten Japanese text, likely a historical record or a collection of letters. The text is written in a cursive style (sōsho) and spans across the entire page, including the gutter. The right page contains approximately 25 lines of text, while the left page contains approximately 22 lines. The characters are densely packed and show signs of being a continuous narrative or correspondence.

八島産根魚

三階著なりと云又元禄十五年の書云んが是也
根魚の法元禄十五年の
の書云んが是也根魚の法元禄十五年の



元禄十五年の書云んが是也
根魚の法元禄十五年の
の書云んが是也根魚の法元禄十五年の
の書云んが是也根魚の法元禄十五年の

林羅山の銘々

馬村玉忠大守之方子見都たれか贈亦又...
はじめの頃には... 後... 妙也

林羅山の銘々今より日録... 鑄... 鐘...
雷田大守寺銅版... 鑄... 鐘...
日寛寺... 鑄... 鐘...

風来山入居住

新島は、今より三百年ほど前、高野山から来た僧侶が、此地に立寄り、草庵を建てて居た。その時、山に雲霧が立ち、石が落ちて、僧侶が死んだ。その石を埋め、石神といふ。

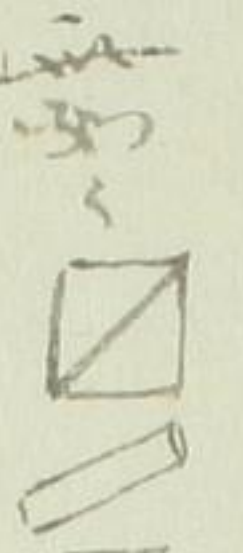
難司菩薩時寺の鐘

新島は、今より三百年ほど前、高野山から来た僧侶が、此地に立寄り、草庵を建てて居た。その時、山に雲霧が立ち、石が落ちて、僧侶が死んだ。その石を埋め、石神といふ。

古名石神

石神の鐘

石神の鐘



石神の鐘、古名石神。其の鐘、高野山から来た僧侶が、此地に立寄り、草庵を建てて居た。その時、山に雲霧が立ち、石が落ちて、僧侶が死んだ。その石を埋め、石神といふ。

新島は、今より三百年ほど前、高野山から来た僧侶が、此地に立寄り、草庵を建てて居た。その時、山に雲霧が立ち、石が落ちて、僧侶が死んだ。その石を埋め、石神といふ。

長徳二年二月廿七日

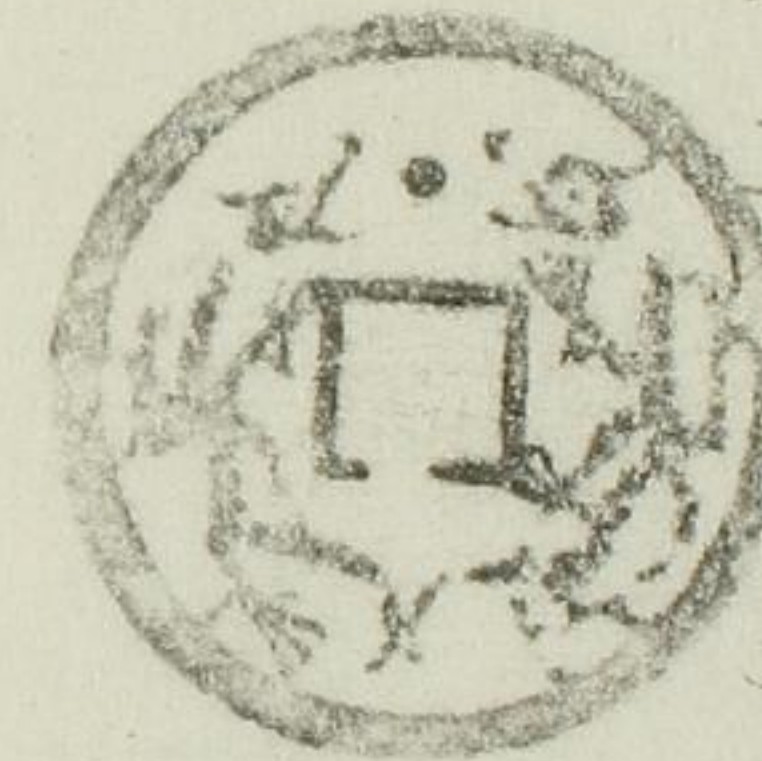
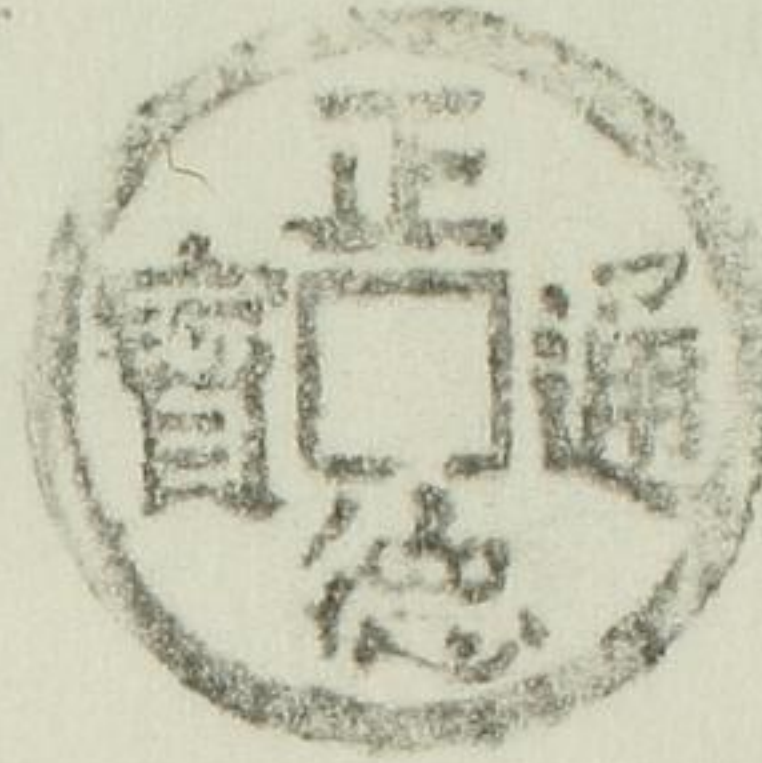
何れに... 長徳二年二月廿七日... 何れに... 長徳二年二月廿七日... 何れに... 長徳二年二月廿七日...

友古権... 雲山邊... 遊雲勝記... 三境一覽... 武蔵志... 日誌... 友古権... 雲山邊... 遊雲勝記... 三境一覽... 武蔵志... 日誌...

受取の三喜人

受取の三喜人と云ふは
北下庭園の三喜人
香筑蓮花寺
香巻成城寺
也知鳥寺と云ふ人

正徳の勝銭



これなり

古泉通、これより正徳通寶一雙龍之、二雙鳳、雙龍者、徳代所
鑄、鳳則、確為、明錢、然、此、北、碕、設、於、藤、仁、寺、見、正、徳、通、寶、之、
文、如、瑞、鳥、收、是、正、徳、通、寶、之、
作、龍、文、已、久、矣、と、云、ふ、の

ビツヤニ

ビツヤニの字、前、に、記、し、て、ある、は、
考、証、の、か、ら、な、り、と、云、ふ、は、
考、証、の、か、ら、な、り、と、云、ふ、は、
考、証、の、か、ら、な、り、と、云、ふ、は、



ビツヤニの字、前、に、記、し、て、ある、は、
考、証、の、か、ら、な、り、と、云、ふ、は、
考、証、の、か、ら、な、り、と、云、ふ、は、
考、証、の、か、ら、な、り、と、云、ふ、は、

山崎三七五
二八

海老名

元...

林河先生の播茶茶農録と題す日筆本七拾
巻林美子氏蔵其書中平山行藏の逸話
番所の七壽人と云ふ平山名捕り間ありし
...
清書宛向... 色がある茶... 熟する...
... 未銅...
...
... 海老名...

共古日録 十五終 用百八



Handwritten text in various colors and orientations, including:
- Red section: 茶 (Tea)
- Yellow section: 蘇 (Su)
- Green section: 茶 (Tea)
- Pink section: 茶 (Tea)
- Blue section: 茶 (Tea)
- Orange section: 茶 (Tea)
- White section: 茶 (Tea)

